

# フミフレ通信



## 次号、最終回!

### ところで「文通」ってなんで面白いのでしょうか?

12月も早半ば...以前お知らせした通り、フミフレは年内で終了いたします。この通信も次号が最終回。最後までお付き合いください。

さて、ここでは毎回「手紙・文通」はなぜ面白いのか、そして、それにまつわるエピソードをご紹介します。今回は「文通」の面白さについて書いてみたいと思います。いきなり結論なのですが、文通の面白さは、「顔も素性も知らない人と手紙をやりとりする」ことなのだと思います。手紙を書きながら、相手がどんな人なのだろうかと想像したり、会ったこともない人に自分の心の内を打ち明けたり...日常ではまずありえない、人との不思議なつながりが魅力ではないでしょうか。

「働けどはたらけど猶わが生活 楽にならざり」  
じっと手を見たことで有名な石川啄木は、明治41年、函館から上京、千駄ヶ谷の新詩社に入社し、与謝野鉄幹のもとで文芸活動を行います。新詩社に

は短歌の添削指導を行なう「金星会」という組織があり、啄木はその会を任されることになりました。そんなある日、平山良子と名乗る女性から啄木に短歌の添削をしてほしいという手紙が届きます。啄木(既婚)は良子(24歳・独身)の短歌を親切丁寧に添削し、「写真を下さい♡」という手紙を添えて返信。すぐさま返事があったようで、当時の啄木の日記には「平山良子から写真と手紙。驚いた、中々の美人だ!」とあります。どうしても会いたくなかった啄木は、短歌の添削仲間を使って探りを入れました。すると、平山良子は実は良太郎という男性で、写真は良太郎の馴染みの芸者だったのです。バレてしまった良太郎は謝罪の手紙を送りました。啄木はそれまで「平山良子様」と書いていた宛名を、「平山良子殿」と書いて返信したそうです。

あの啄木がねえ...と思わせるエピソードですが...いやあ、「文通」ってオモシロイですね!

次回の会報は**12月25日(金)**に発送いたします。そのため、お手紙の回送受付は発送日前営業日の**12月24日(木)**までに事務局に届いたものとなります。事務局への到着日をご確認のうえ、お送りくださいますようお願いいたします。また、事務局へのご意見・ご要望などがありましたら、事務局宛にお便りをご同封ください。下記メールアドレスでも受け付けております。お気軽にご連絡ください。 [customerservice@fumifure.jp](mailto:customerservice@fumifure.jp)

